

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：20101

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K18605

研究課題名（和文）医師偏在改善につながる地域医療志向性を醸成させるための量的質的方法論の開発

研究課題名（英文）Development of Quantitative and Qualitative Methodologies to Orientation for Community-based Health Care that Leads to Improvement of Physicians' Distribution

研究代表者

杉村 政樹（Sugimura, Masaki）

札幌医科大学・医療人育成センター・教授

研究者番号：80790071

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：北海道では医療従事者は都市部に偏在しており、人口減少地域では最低限必要な人員も確保できず恒常的な問題となっている。今回の研究では、医学生が自ら地域医療への志向性を向上させるための因子探索を目的に、準備教育の実践を通じてその因子を探る研究である。早期からの地域医療実習のみでは、これまでの研究では短期的な志向性向上は認められたに過ぎず、高学年になるほどその意識が薄れることがわかってきた。しかし、本研究で行った、継続的な地域住民及び地域と学習者との交流、および新型コロナウイルス感染症に端を発した、ICTを駆使したハイブリッド学習において、地域医療への志向性がより持続的であるという傾向がうかがわれた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じ、医学部低学年における早期地域医療実習は、一時的な実習では不完全であることが明らかになるとともに、短期間でも年次を越えた継続的な実習を行うことと、教育者と学習者が、地域住民及び地域行政との中長期的な関わりを持つことで、地域で働きたいという、志向性が醸成されることが判明した。今後の問題として、臨床実習をはじめとする医学教育における教育分量の増大によるカリキュラムの圧迫とどう調和を図るかがあるが、正課外の活動などを通じた取り組みがポイントとなるものと考えられた。

研究成果の概要（英文）：In Hokkaido, the number of medical personnel is unevenly distributed in urban areas, and in areas with a declining population, it is impossible to secure the minimum necessary personnel, which is a permanent problem.

In this study, medical students explore factors through the practice of preparatory education in order to explore factors to improve their orientation to community health care.

Only early community medical practice showed that previous studies showed only a short-term improvement in orientation, and that awareness declined with higher grades. However, this study showed a tendency to be more sustainable in community and community interaction with learners and in ICT-based hybrid learning triggered by new corona infections.

研究分野：医学教育学

キーワード：地域医療教育 早期体験実習 地域医療志向性 地域一体教育パッケージ

1. 研究開始当初の背景

北海道は全国の20%以上の面積を持つ広大な地域である。他府県同様、医療従事者は都市部に偏在しており、人口減少地域や離島では最低限必要な人員も確保できず、それらの地域に暮らす人々に不安を与え、大きな社会問題となっている。医師数は北海道全体では全国平均を上回っているものの、面積が広く住民が分散されているため、充足数を満たしていない地方の公立病院が約3割もある。北海道の医育期間は3つあり、本学(札幌医科大学)が北海道公立大学法人であることより、北海道の地域医療に貢献する旨、理念に掲げられている。現在本学では学費を奨学金とする「特別枠」をはじめ、地域枠、北海道医療枠など、一般枠とは別に卒業後一定期間北海道内で医療に従事させるなどの取り組みを行っているが、一定期間を過ぎると都市部に移る傾向にある。その一方で、指導医相当の年次の医師はそのような縛りがないため、従来より都市部偏重の傾向があり、地方町村では恒常的な医師の確保は町政を左右するほどの大きな課題となっている。

2. 研究の目的

本学は北海道が設置者の医科大学で、1)進取の精神と自由闊達な気風、2)医学・医療の攻究と地域医療に貢献しうる医療人を育成し、かつ国際的にも活躍できる医療人、研究者の育成を理念として掲げている。また、アドミッションポリシーには「高度な知識と人間性を有する医療人として、将来地域医療に貢献できる人材育成」とある。そのため、約10年前より、全学科(医学科、看護学科、理学療法学科、作業療法学科)合同の地域医療教育として、多職種連携教育実習(Interprofessional education; IPE)を行っている。当時は、全国的にも珍しい取り組みとして注目され、以後国内複数の医育機関で同様の実習が行われているが、これまでの検討は実習直後の意識の変化や高学年～卒業後の意識変化についての発表がほとんどで、実際、どのくらい地域医療(特に人口減少地域)に寄与しているかの研究はなされておらず、現実はそのそれぞれの医育機関が奨学金を付した「地域医療枠」のような一定年限、地域での勤務を義務化させるような形で、地域医療に従事させているのが現状である。しかし、人口減少地域での医療者不足の原因として、マスコミ等で取り上げられている「専門医」や「認定看護師」の取得が遅れるというようなもの以前に、そこで指導的な役割をする医療者がいないということも大きな障壁となっている。そこで、本研究ではこれまでの特徴的地域医療教育を振り返ると同時に、教育環境・卒業後環境・それ以降の社会的環境を調査し、入学後からの地域医療マインドの変化との関係を明らかにすることによって、地域における医療者の不足を改善しうる要素を提唱することを目的とする。

3. 研究の方法

対象者は本学在学学生、と地域自治体(本研究では北海道別海郡別海町、北海道利尻郡の自治体)の保健・介護行政に携わる人、およびその地域に住む住民である。

調査方法は、医療者に対して、在学中に行われた地域医療に関する実習・講義についてのアンケート、多職種連携の指標であるRIPLS、および本学で開発した地域に根差した多職種連携意識の指標(CBIQ;未発表)調査、現在の診療科、勤務場所、地域医療に対する意識アンケート、在学中の学習環境についてデータ収集を行う。また地方自治体の対象者には地域の医療機関・介護福祉に要望することなどを行政・住民からみた視点で質問紙法にて調査する。また現在地域医療に関わっている医療者についても、医療従事者の確保・定着に焦点をあてて、同様に質問紙法にて調査する。

4. 研究成果

(1) 教育実践

「コロナ禍における地域医療志向性向上を目的とした地域医療教育」

現地実習は目の前の事象が概念化されやすいことから、能動的に取り組みやすいが、オンラインでは画面の向

この出来事であることから、ともすると受け身になりがちになることから、この点について特に工夫した。

・カリキュラムのアウトカム

「保健・福祉・介護と医療のかかわり・課題について、専門職とディスカッションをしながら、自己の意見を述べるができること、地域社会・地域医療を取り巻く資源についての概要を説明できる」こととした。

・学習者理解・ニーズ評価

前年度の地域滞実習の振り返りアンケートにて、「1 か所しか実習に行けないため、他の地域との比較がしにくい」という意見が複数みられたことから、時間帯で各地をオンラインで巡回することにより、地域別の比較がしやすいと考え、全員がすべての協力病院に参加できるよう、タイムスケジュールを設定した。

(2) 教育内容と振り返り

本来の実習期間(3日間)は、オンラインで協力病院を巡回し、担当グループと協力病院の医療職がオンラインフォーラムを行い、担当でないグループはフロア参加者として、聴講あるいは質疑に参加させた。(後述)フォーラムでは共通テーマとして「都市部での医療とのちがいについて～地域の医療を担うために求められる医師像～、医師以外の医療職とは、「一緒に働きやすい医師とは」とし、そのほかとして「地域の文化・風習」、「病診連携・その他の施設との連携の現状」「入院・外来患者の特徴」など、あらかじめグループで話し合われた内容を討論の題材にするよう指導した。また、科目オリエンテーションでは「チーム医療の重要性」について、医療現場で行われているチーム医療の例としてNST、呼吸ケア、緩和ケア、褥瘡管理チームについて取り扱った。

・(オンライン実習)実施方法

現地滞実習では、あらかじめ提示したひな形に沿って(表1)実習病院にプログラムを作成してもらうことで、地域の現状に応じたプログラムが作成でき、また、学生教育に参画しているという意識をもてる機会としている。今回のオンライン実習では、同様の内容をすべてオンラインで実施するのは困難と考え、上述の共通テーマ及びグループ討議で抽出されたテーマについて討論会を実施することとした。また、本来の実習により近づけるために、あらかじめ動画を作成してもらい、オンライン実習の前に視聴した上で、参加することにした。オンラインツールとしてはZOOM(オンライン討論のパネリスト、担当グループ学生)、Webex(担当グループ以外の学生)としWebexはZOOMでの討論の様子を中継して実施した。本来的にはウェビナー形式が望ましいが、時間で対象病院が変わるため、設定上の効率を考慮して、このような形態で実施した。

1日目	2日目	3日目
午前： 実習地へ移動	午前： ・外来患者へのインタビューなど ・連携する行政、福祉施設と病院の役割についての説明・演習	午前： ・病院と連携を持つ福祉施設で、医療・介護・福祉の連携について講話、演習 ・入所者とのコミュニケーション
午後： ・病院の地域での役割等の概要説明 ・医師やコメディカルスタッフの病院内での仕事を見学	午後： ・学生による健康教育セミナー ・翌日の実習施設を訪問し、挨拶、実習内容確認	午後：移動

・振り返り

協力病院及び学習者に対しアンケートを実施した。協力病院からは「動画作成のイメージがわからず、病院の紹介が中心になってしまった」、「動画作成の負担が大きい」、など動画作成支援を望む意見が多かったが、その一方で、「動画を各部署に作成させたことによって、良いコミュニケーションが生まれた」、「自施設の地域での役割について、あらためて考える機会となった」、というようなポジティブな感想も寄せられた。しかし、オンライン実習については、「時間が短すぎて地域の良さを十分に伝えられなかった」、「ネットの不調もあり、

音声聞き取りにくかった」「学生の質問コーナーのような流れになりがちなので実習とは言えないのではないか」など大幅な改善が必要と思われる意見が多かった。また学習者からのフィードバックでは、「短期間で北海道の様々な地域の病院を巡回することによって、地域によって病院の持つ役割が異なるということを実感した」、「面と向かって話しにくいことも質問できたことによって、地域で働く医療職の本音を聞くことができたように感じた」、「このオンライン実習を受けてから、現地で実習に参加できれば理解が深まる」、など概ね肯定的な意見が目立った。

(3) 教育実践を通じた調査結果を通じて

本実習の対象者である1～3年生(前期)では座学と学内でリベラル・アーツ、基礎医学に関連した実習がほとんどであったため、学習に対しては消極的(受け身)である傾向があるように感じられていた。しかしながら地域滞在型実習後のレポートを読んでもと、実習を通じて医療人になることへの自覚や大学での自主的学習・調査への意欲が増したという感想が多く、振り返りでは、相手を思いやる気持ち、チームワーク、地域医療への貢献、重責を実感、などの文言が目立っていた。我々実習企画者、あるいは受け入れ側の医師としては、実習を通じて「ロールモデル」を見いだすことであると考えている。地域の第一線で活躍する医療関連職種に出会うことによって、将来目指すべき医療人像を描くことができるよう期待したい。また本学在学生の約8割は北海道出身者であるが、面積が広大なため、行ったことのない地域が多数あることより、実習を通して北海道内各地の地域としての魅力も伝えることもでき、一連の本実習の目的の一つである「地域医療マインドの醸成」に寄与しているのではないだろうか。実習後の学生のアンケートでは、本実習に対する満足度・充実度が高く、地域医療の魅力も参加学生に響くものがあったことが考えられた。しかしながら、本実習の最終目標は「医療人の偏在の改善」である。一連の実習が終了した後は、臨床実習前共用試験 CBT/OSCE・臨床実習・臨床実習後 OSCE・国家試験と、学生にとっては大きなイベントが目白押しである。この実習を受けた学生がその後、実習地のような医師・看護師不足地域での勤務にどの程度寄与しているかについては、必ずしも追跡ができておらず不明である。しかし、学生が自大学病院等の内部にとどまらず、直接地域に出向いて住民・医療関連職種と交流をしながら、地域における医療・介護・福祉に対するニーズをライブで感じることは、住民(患者)目線で考えることのできる医療人になるために必須であることは言うまでもない。その際、職種横断的な立場のグループ、地域の各職種が一堂に会して実習をすすめる「多職種連携」教育による相乗効果も期待できると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 杉村 政樹、杉浦 真由美、鶴飼 渉、相馬 仁	4. 巻 43
2. 論文標題 【進化するIPE 地域包括ケアシステムが求める多職種連携教育の今】看護職以外の他職種から見たIPE 札幌医科大学の医学部臨床実習前のIPE短期滞在型地域医療実習 地域密着型チーム医療実習受け入れ側の 医師の立場から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 看護展望	6. 最初と最後の頁 882～888
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉浦 真由美、杉村 政樹、鶴飼 渉、相馬 仁	4. 巻 43
2. 論文標題 【進化するIPE 地域包括ケアシステムが求める多職種連携教育の今】導入事例 大学の特色を生かした IPE 札幌医科大学の地域基盤型のIPE	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 看護展望	6. 最初と最後の頁 800～808
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴飼 渉、辻野 華子、杉村 政樹、木川 昌康、田山 真矢、石井 貴男、古瀬 研吾、廣瀬 奨真、橋本 恵 理、澤田 いずみ、山本 武志、白鳥 正典、河西 千秋、相馬 仁	4. 巻 9
2. 論文標題 深い学びの要 ディープコミュニケーションとは何か どこどこで会話をしているのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 医療人育成センター紀要	6. 最初と最後の頁 35～43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉村政樹
2. 発表標題 リベラルアーツ学修の場としての地域医療 卒前における地域医療実習と地域固有の文化のかかわり
3. 学会等名 第53回日本医学教育学会大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉浦真由美, 杉村政, 鶴飼, 相馬仁
2. 発表標題 看護師教育における実地指導者育成コースの開発
3. 学会等名 第51回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 孤田孝行, 荒井貞夫, 篠田章, BREUGELMANS Raoul, 井上茂, 平山陽示, 大塚康司, 山崎由花, 池田行宏, 杉村政樹, 中川美奈, 廣井直樹
2. 発表標題 DREEM(Dundee Ready Education Environment Measure)を用いた学習環境の評価
3. 学会等名 第51回日本医学教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉村政樹
2. 発表標題 COVID-19パンデミックが地域医療教育に与えた影響を振り返る：札幌医科大学の例
3. 学会等名 第54回日本医学教育学会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------